

2023年9月10日（聖霊降臨後第15主日、特定18、A年）

牧師メッセージ

「赦しと和解の共同体」

（マタイによる福音書18:15-20）

司祭ヨセフ太田信三

今週の福音の直前の箇所（10-14節）は「迷い出た羊」のたとえです。このたとえは、「そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」と結ばれます。神はたった一つの命であっても、失われることを望みません。今日の福音は、「罪を犯した兄弟に対して取るべき態度」をテーマに展開されます。クリスチャンとして取るべき態度がとても具体的に記されていますが、大切なことはそれが「兄弟を得る」ためである、とされていることです。これは、ことに最近のこの世的な感覚とは全く異なる態度と言えます。たとえば、芸能人の「不祥事」があるたびに、インターネットを中心に総掛かりでその人を「叩く」ということをわたしたちは目にします。そこにはその人と兄弟となる、などという姿勢を見出すことはできません。しかし聖書が求める姿勢はそれとは全く異なります。なぜなら、神はたった一人の小さな者が滅びることをも望まれないからです。罪を犯した兄弟は、「迷い出た羊」です。今日の福音では、その「迷い出た＝失われた」羊を「得る」ことが求められています。それが神の思いなのです。だからこそわたしたちは相手を滅ぼすためではなく、「兄弟を得る」ことを目的にしなければなりません。一度の忠告が相手に聞き入れられずとも、「兄弟を得る」ためには、繰り返し忠告することが必要です。まずは一対一で、それでダメなら一人か二人の兄弟と共に、それでもダメなら最後には教会という公の場で忠告するように、と主イエスは教えます。それは、その目的が相手を打ち負かすことや、非難や中傷にあるからではなく、「兄弟を得る」ことにあるからです。

主イエスにある交わり、教会共同体の交わりはいつも、「兄弟を得る」ためのものでなければなりません。たとえ争いがあっても、互いに求めなければならないことは、相手を一方的に打ち負かすことではなく、「兄弟を得る」、つまりまことに神の家族とされることを望み、願い、互に関わることです。勝敗がつけられ、どちらか一方が戒められ、懲罰を課されるという発想ではありません。もちろん、戒められなければならないことを見過ごさない、ということではありません。相手がそのような罪を犯してしまったとしても、相手を排除することや一方的に打ち負かすことを求めるのではなく、あくまで「兄弟を得る」ことを求めなさいと命じられているのです。神がわたしたちをこの教会に集めたのは他にもない、わたしたちが神の家族となるためであり、今日の福音が記すことは、キリストによって家族とされた者の間に争いや罪を犯す者がいたとしても、忠告しあい、赦しと和解のうちに、主よって集められた交わりを求めなさい、ということです。

「忠告する」という言葉は、「光にさらす」という意味を持ちます。光とは、神の愛と言えます。つまり忠告するとは、わたしたちたった一人の命が滅びることを望まない神の思い、神の愛に相手をさらすことなのです。神はあなたの命も、あなたが罪を犯し、軽んじてしまった命も愛しているのだ、と伝えることが「忠告」することです。そうして、滅びを望まない神の光で相手を照らし、相手の心を神の思いへと向けさせること。たとえそれを聞き入れない相手であっても、辛抱強く最後まで「忠告」することを、主イエスは命じています。

罪を犯した側、つまり忠告を受ける側の人間もまた、「兄弟を得る」ことを求めているなければ、忠告はなかなか届かないかもしれません。心も手段も尽くし、それでも忠告が相手に届かない事があるでしょう。その場合には、最終的に教会にも聴き従わないならば、その相手を「徴税人や異邦人」と同様に見做して良いと、主イエスは言われています。徴税人や異邦人とは、神に従わない存在の象徴

として語られているのですが、これはそういう場合には相手と適切な距離を取りなさい、ということです。徴税人や異邦人であっても、主イエスは出会い、導かれました。しかし、その時と場所は主が決めることであって、わたしたちには決めることができません。今はまだ相手が聞き入れる時でないならば、今は適切な距離を取り、あとは主に委ねることを、主イエスは教えてくださっているのです。つまり、あくまで教会とは神のもとでの赦し合い、和解を求め続ける共同体である、ということです。たとえ相手が忠告を聞き入れないとしても、自ら相手を裁くのではなく、適切な距離を置いて、あとは主に委ねる。しかも、兄弟となることを願いつつ、主に委ねることです。

ユダヤ教でも、罪を犯すものへの忠告は仲間の義務とされています（レビ記19:17他）。その義務の裏には、一貫して「これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」という神の思いがあります。その思いは今、教会へと委ねられています。教会が「地上でつなぐことは、天井でもつなぐれ、地上で解くことは、天井でも解かれ」ます。「つなぐ」とは、「許さない」、「解く」は「許す」を意味します。許す、許さないという教会の権威は人間によるものではなく、教会の中心におられる主イエスと、天の父によるものです。なぜなら、教会とは、主イエスが「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」と言われている通り、主イエスの御名がその中心に置かれた集いのことだからです。教会とは主イエスが真ん中におられる集まりのことです。わたしたちの中心にはいつも主イエスがおられます。「あなたがたのうち二人が地上で心をついに一つにして求めるなら、わたしの天の父がそれをかなえてくださる。」ということは、共におられる主イエスが一緒に求めてくださるからこそ実現することなのです。たとえ、どうしても赦せない相手がいたとしても、わたしたちの真ん中におられる主イエスが共に願ってくださり、たった一人の命をも滅びることを望まない神の思いがそこにあるからこそ、人間だけではなし得ない、赦しと和解が「教会において」実現します。

なによりも、わたしたちの教会は、主イエスによって赦された者たちによって担われ、受け継がれてきたことを忘れずにいたいと思います。あの主イエスを裏切った弟子たちを、主イエスは赦しました。教会の始まりには、主イエスの赦しがあるのです。わたしたちは主イエスの赦しの元に集められ、生かされているのです。だからこそ、わたしたちは赦し合う共同体でなければなりません。この世において、赦しを知る者として、赦しと和解のために働く者たちでなければなりません。主イエスによって集められたわたしたち教会は、いつも罪を犯した者への忠告を行うようにと求められています。日々この世界で、「あなたのことも、あなたが出会うすべての命のことも、神は愛している」ということを伝え続けることを、わたしたちは求められているのです。それが、「兄弟を得る」ことを求める、ということです。兄弟を獲得することは、人間だけの努力によるものではありません。まず主イエスがわたしたちを赦し、そしてその主イエスがわたしたちの真ん中に常にいてくださり、共に願ってくださるからこそ、そしてたった一人の命をも滅びることを望まない神の思いがそこにあるからこそ、人間だけではなし得ない赦しと和解が実現するのです。

パウロは言っています。「愛には偽りがあってはなりません。兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。」聖書の語る愛、神の愛とは、敵をも愛する愛であり、限らない赦しを含む愛です。神からその愛を注がれているわたしたちは、その愛をもって互いに接しなければなりません。この世において、どのような相手に対しても神との愛の交わりの中で、「兄弟を得る」ことを求めて交わることです。「せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らなさい。」とパウロが言うように、関係を分断させようとする力がはびこるこの世にあって、神の愛によって結ばれた、赦しと和解の共同体として、主イエスとともに、神の思いとともに歩んでまいりましょう。